

吃音と生きる

3 就労を阻む高い壁

こんどうゆうき
近藤雄生

ノンフィクションライター

1976年東京都生まれ。東京大学大学院修了後、5年半にわたって世界各地を旅・定住しながらルポを執筆。08年に帰国。著書に『遊牧夫婦』『中国でお尻を手術』『終わりになき旅の終わり』など。

「おはようございます!」という挨拶ができない。電話に出ることが恐ろしい。たとえ働き口が見つかったとしても、「予期不安」が吃音者を苦しめ続けている。

二〇一四年一月、愛知県のあいち健康プラザにおいて「吃音ワークショップ2014 in 愛知」が開かれた。吃音者の自助団体である「言友会」が主催する年に一度の全国大会であり、日本各地の吃音者が集まる場となっている。三日間の大会の初日にあたる一月一日の午後、会場の舞台上には高橋啓太の姿があった。

高橋は幼いころから重度の吃音に苦しんできた。その苦悩によって一度はマンションから飛び降りてもいる彼にとって、人前で話すことは最も恐ろしいことの一つだったはずである。だがこの日、参加

していた一〇〇名を超える吃音関係者を前に、高橋は壇上の席に座ってまさに自分自身の言葉で語り出そうとしていた。黒い眼鏡の奥の眼をまっすぐに前に向けて、彼は、三六年の人生でおそらく初めての瞬間が来るのを待っていた。

高橋から初めてじっくり話を聞いたのはすでにこの一年以上前のことになる。名古屋のコメダ珈琲店で、苦しそうに顔をゆがませながら話す彼の言葉を聞いて、吃音症状の重さだけでなく、生活が想像以上に大変らしいことを私は知った。家庭内の事情により、彼はほぼ一人で娘さんを育てている状態にあり、その上、正

社員として働いていた会社を辞めざるを得ず、新たな仕事も決まらずにいた。

娘さんの食事作りから保育園の送り迎えまで一人でこなす日々の中で、高橋には安定した仕事はどうしても必要だった。しかし、面接や電話への猛烈な恐怖感で求人に応募すらできないことも少なくなかった。できた場合も、採用はあまりにも遠かった。

このままでは生きていくこともままならない。高橋は追い詰められ、なんとしても吃音を治さなければと思うようになった。そんな時、以前一度縁のあった羽佐田竜二という言語聴覚士に再会し、今

前で、ど、もる、く、らい、なら、話したくない、きも、ち、ちち、も、あるんです。

番組の映像が終わると、静まりかえった会場にマイクを通した高橋の声が響き渡った。ゆっくりとだが、番組とは打って変わってスムーズに彼が話し始めるとみな聞き入った。高橋は感情を込めてこれまでの経緯を話した後、こう言った。「人から、何かうれいことをしていただいても、なかなか、感謝の言葉が、言えませんでした。でもいまは、言えるようになりました」

声を震わせ、今度は吃音ではなく涙で言葉を詰まらせた。そして、会場にいた羽佐田に向けて、高橋は思いを込めてこう口にした。

「羽佐田先生、ぼくを話せるようにしてくれて、ありがとうございます」

その夜私は、高橋と二人でゆっくり話す機会を得た。知り合った頃とは別人のように言葉が出る彼の姿に私は改めて驚かされた。だが、それでも生活の大変さが変わったわけではないと彼は言った。

吃音が改善して、以前に比べたら明らかに生活はしやすくなっている。しかしいまでも不安定な派遣の仕事で食いつなぐ日々で、生活の不安はぬぐえない。三〇代後半という年齢のせいや、子育てをしながらという難しさもある。また吃音が改善されたとはいえ、必要なときにどうもならないようにコントロールする方法を身につけただけであり、どもらずに話し続けることは疲れるともいう。だから、コンビニの店員のように話す機会が多い仕事は難しい。

「でも、自分にできる、仕事なら、何でも、やります。若い子の下に、ついて、こき使われても、きつい肉体労働も、何も、苦痛に思いません」

自分の人生の主人公は、いまや娘なんです。高橋はそう言った。娘とともに生きていくためならどんな仕事でも厭わない。とにかく安定した仕事がほしい。しかし、どうしても見つからない――。

高橋の問題は、状況こそ違えど多くの吃音者に共通する。吃音は就労時に大きな足かせとなるのである。名前が言えな

度こそ彼を信じ、彼のメソッドに取り組むことを決意する。高橋は毎日必死に訓練に取り組んだ。するとその凄まじい努力と彼を支える羽佐田の情熱によって、高橋の吃音は少しずつ、しかし明らかに変わっていったのだ(『新潮45』二〇一四年二月号・七月号に詳細)。

ぬぐえない生活の不安

高橋が話をする前、彼が以前出演した吃音に関するテレビ番組の映像が流された。それはまだ訓練を始めていないころのもので、吃音は重く、インタビュールの高橋は苦しげな表情に満ちていた。言葉に詰まり、顔全体を力ませて顎を上突き上げる。その勢いで何とか一つずつの音を絞り出しながら話し続けた。《人、

い、電話ができないといったことが、吃音者と社会の間に大きな壁を築き上げる。その壁の前で無数の吃音者が人知れず途方にくれ、苦悶している。

「小学生でも言える」

歯科医師の竹内俊充もそんな一人だ。現在四〇代で、小学生のときから吃音に悩まされてきた竹内は、働き始めたころのことをいまも容易ならぬ気持ちで思い出す。ある夜、彼が院長を務める名古屋市内の医院を訪ねると、仕事を終えたあとの白衣姿のまま、記憶を噛みしめるように当時のことを話してくれた。

学部を終えて歯科医師の国家試験に合格すると、竹内は大学院に進学した。その間、生活と経験のために医院でアルバイトをしなればならなかったが、困難はその時から始まった。求人を見て電話をしても、どもりながら話すと、「うちには空きがありません」などと理由をつけられ断られてしまうのだ。

大学の先生で紹介でなんとかバイト先は見つけることができたものの、そこで

もいつも、院長に怒られた。「小学生でも言えることだろうか？ なんてお前はそんなことができないんだ？」。しかし竹内は、自分の吃音のことをうまく説明することができず、ただ「は、はい、すみません、が、頑張ります」と答えるのが精いっぱいだった。

大学院を修了すると別の医院に就職したが、厳しい状況は変わらなかった。竹内は、語尾を伸ばすと話しやすくなるため、「そうですよー」などと話すことが多いが、「軽く見えるからやめろ」と言われ、一気に話せなくなってしまったのだ。また、治療後の患者への説明は、一字一句マニュアル通りに話すことを求められたが、それも竹内の最も苦手とすることだった。院内での立場は徐々に苦しくなっていた。

「結局、数カ月で、辞めさせられました。うちの診療スタイルと、合わないとか、先生は小児の診療の、方が向いているから、とか言われましたが、話し方で、辞めさせられたのは、明らかでした」
時々少しだけ言葉詰まらせながら竹

挨拶もできない

竹内が訪問診療の扉を叩こうとしていたころ、大学院の修士課程にいた私もまた、自分自身の吃音を一つのきっかけとして、就職せずにフリーのライターとして生きる道を考えるようになった。大学院を修了すると、まずは吃音をテーマに書いてみようと思いつき、初めて自分以外の吃音者に意識的に会っていくということを試みた。その中で、自分と同世代の人たちと会って話すほどに、みな社会に出るといふ節目の前に、同じように苦悩していることに気づかされた。

たとえば1という男性がいた。大学で国際関係論を学んでいたという彼は、

時々目を苦しそうに歪ませながらも、熱心にゲーム理論の話をしてくれた。Iはその分野に強い興味があるようだった。しかし、卒業後に彼が仕事として選んだのは、ビルの清掃員だった。「清掃員だったら、話さないでもできるし、清掃の技術だけで評価されると思っただけです。ぼくは、電話の応対や接客とかは、できませんしね。清掃という技術をちゃんと、身につければ、話すこと、抜きでも、ずっと、食べていけると思っただけです。でも、実際には、そんな簡単な話では、ありませんでした」
清掃業もまた、話すことと無縁になれる仕事ではなかったのだ。「おはようございます！」「ご指導ありがとうございます」

「おはようございます！」と挨拶をしながらも、熱心な話をしてくれた。Iは「清掃の技術だけで評価されると思っただけです。ぼくは、電話の応対や接客とかは、できませんしね。清掃という技術をちゃんと、身につければ、話すこと、抜きでも、ずっと、食べていけると思っただけです。でも、実際には、そんな簡単な話では、ありませんでした」
清掃業もまた、話すことと無縁になれる仕事ではなかったのだ。「おはようございます！」「ご指導ありがとうございます」

東北のルーツを見つめ直し
新たな“北”の歴史像を描く
【企画編集委員】熊谷公男・柳原敬昭
東北の古代史
全5巻
7月刊行開始
各2400円
「内容案内」送呈
※7月より隔月に
1冊ずつ配本予定


戦没者合祀と靖国神社
赤澤史朗著 2500円
誰が祀られ、誰が祀られなかったのか。揺れ動く合祀基準のゆくえ。

歴史のなかの石造物
人間・死者・神仏をつなぐ
山川均著 人は“石”にどんな思いを込めたのか？ 石造物造立の歴史的背景を探る。 2500円

広島藩 (日本歴史叢書71)
土井作治著 安芸・備後両国を領域とした外様の大藩。藩社会の特徴や自立性を解き明かす。3200円

出雲尼子一族
米原正義著 山陰・山陽の覇者！ 一族盛衰の歴史を鮮やかに描く。(読みなおす日本史) 2200円

歴史文化ライブラリー
全冊書き下ろし 各1700円
406 **高師直** 室町新秩序の創造者
亀田俊和著 南朝忠臣の好敵手、足利直義の政敵。悪人イメージが根強い、尊氏の執事師直の実像！

407 **将門伝説の歴史**
樋口州男著 叛逆者と英雄の狭間で揺れる“将門”評。時代と地域に育まれた将門伝説の世界へと誘う。

吉川弘文館
〒113-0033 東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151/価格は税別

内はそう言った。そして、ふとメガネを外すと目をこすった。「なんで涙が出てくるんだらう」。照れ笑いを浮かべ、一呼吸を置いてから話を続けた。
自信を失った竹内は、辞めさせられたことを親にも言えず、しばらくは医院に通っているふりをしながら、パン工場アルバイトをした。なんておれはダメな人間なんだ。劣等感に苛まれ、自分の今後に絶望したが、ベルトコンベアの前で黙々と食材に向き合う仕事は、何も話さなくていいという一点によって彼に安らぎを与えてくれた。
しかしずっとそうしているわけにもいかなかった。やはり歯科医師としてやり直したいという気持ちが湧き上がってくる。そんなある日、ネットカフェで求人情報を調べているときに見つけたのが「訪問診療」という世界だった。
「訪問するのは、高齢者の方が、多いから、それならぼくの、話し方も大目に見てくれるかな、と思っただけです」
竹内は再起の道を見出した。二八歳の、ある夏の日のことだった。

そうやってIは、どうすればいいのかわからないと宙を見つめた。

昨年暮れに京都市で会った一人の若い男性は、当時のIと同じくらいの年齢だった。市内の中心部にあるごんまりとしたカフェで待ち合わせ、時間ちようどに行くと、男性はすでに奥の席に座っていた。細身で、整ったシャープな顔つきの彼は、神経質そうだが落ち着きがあった。社会に出てまだ間もない彼を前に、ふとIはいまどうしているのだろう、などと思いながら、この吃音者の話を聞き始めた。名を仮に、栗田泰介とここでは記す。

「自分の記憶にはない幼少期に、利き手を左から右に矯正されて、そのときから吃音が始まったと聞いています」

栗田は言った。彼は少し話している分には吃音があるのかどうかはわからない。ただ、「た行」から始まる言葉が言えないなど、特定の音を発することができないのだという。

意識するようになったのは中学時代のことだった。そのころはうまくしゃべれないので、その恐怖によって吃音はさらに増幅する。

横井は、保証人となることを断りに行って強面な相手に怒鳴られたりすると、ほとんどひととも言葉を発することができなくなった。「上司に、相談、します」。なんとか言葉が絞りに出して、逃げるようにして帰ることになったのだ。

あまりの苦しさと日々の不安の大きさに、横井は病院に行つて抗不安剤を処方してもらおうようになる。すると幸い、薬は横井にいい効果をもたらした。事前に薬を飲めば、予期不安は大幅に減り、威

ないのをただ不思議だと思っただけだったが、高校に入ると、ただごとではないことに気付かされた。幸い、苗字の「くりた」はどもらずに言えたこともあり、なんとかやり過ごすことはできていたが、大学を終えて就職し、社会に出ると、吃音は大きな壁となった。

入社してまず任せられた仕事は、最も苦手とする電話番号だった。一日何十件もの電話に出なければならず、そのたびにどもった。「何を言っているかわからないから他の人にかわってくれ」と言われることもしょっちゅうだった。

いよいよ精神的に苦しくなり、栗田は吃音を診てくれるという病院を見つけ、足を運んだ。吃音だという診断書を書いてもらい、会社に電話番号を外してほしいと願った。しかし会社から反応はなかった。栗田にとって吃音がどれだけ切実な問題なのか、わかつてはもらえなかったのだ。

「一ヶ月でやめました。毎日が本当にしんどかったです」

あまり感情を見せなさそうな彼が、鋭圧的な相手に対しても、全く話せなくなるといふことはなくなったのだ。

「これでなんとかなる。そういう気持ちになれたんです」

しかし問題は、思わぬところに潜んでいた。薬のおかげで仕事も落ち着いてきたある日のこと、仕事中に運転していた車で事故を起こしてしまったのだ。渋滞時、停止した前の車に軽く追突しただけで事故としては軽かったが、それは横井の人生を変える出来事になった。以前から医者には、薬を飲んだら運転には注意するように言われていたが、そのときまでは大丈夫だと思っていた。だが、事故の原因が薬による眠気であることは否めなかった。横井は、その同じ月にすでに

い視線を向けて当時の気持ちを思い出すようにそう言った。

予期不安の苦しさ

舞台を再び名古屋へ移す。歯科医の竹内と会った夜、私は一人の言語聴覚士とも会う機会を得た。その彼、横井秀明も吃音者である。吃音があることをきっかけに言語聴覚士を志す人は少なくないが、横井が経てきた経緯は私が全く予想もしていないものだった。

大学を卒業すると、横井は兵庫県の信用保証協会に就職した。中小企業が銀行などから融資を受ける際に保証人となる公的な機関である。就職活動で約三〇社を受けて面接で落とされ続けた中、たった一つの例外となったのがここだった。思うように話せないことから生じる高い壁の前で苦しみながら、なんとか手に入れた職場だったが、営業担当として中小企業を回る日々が始まると、また新たな不安と恐怖に横井は毎日襲われることになった。

「ぼくは『予期不安』がとても強い人間一度、自損事故を起こしてもいたのだ。事故の後、営業に車を使うことを禁じられた。すると、急激に仕事は進まなくなった。その上、すでに決まりかけていた、公費で経営大学院に通わせてもらうという話も消えた。職場ではそれなりに評価されていたはずだったが、状況は一気に変わってしまった。おれはもうこの仕事では芽が出ないかもしれない。しばらくするとそんな気持ちが強くなった。そして、事故から七ヶ月ほどが経った翌年三月、横井は職場を去った。

「心身ともに疲れていて、しばらく休みたいという気持ちでした。でも、フリーターで、実家に戻るのも気が引けて……」

小路幸也

怪獣の夏はるかな星へ

人気作家、初の怪獣小説。1970年夏、子供たちが体験する奇妙な出来事。謎の機械人間や怪獣が次々と町を襲う。そして公害に汚れた地球を救うのはだれか？



● 本体1500円＋税

筑摩書房

サービスセンター ☎048(651)0053
http://www.chikumashobo.co.jp/

絶望感と疲労感に襲われる中、しかしなんとかしなければという気持ちがあった。そしてふと、頭の片隅にあったことを、いまこそやってみようかと横井は考えたのだった。

ここで紹介した人たちの他にも、私は何人もの吃音者から仕事における挫折や苦悩の話聞いた。その一つひとつが、切実に満ちていた。彼らが垣間見せる悲しみとやるせない表情を見つめながら、実際の苦しみは言葉から伝わってくる何十倍も大きいだろうことを想像した。

私も同じように、就労に際し吃音で苦しんだ。だからその気持ちは自分なりに理解できるつもりではある。しかし、なぜだかはわからないが私の吃音は消え、いま、吃音による苦しみはない。

取材をしながら私はいつも思っている。ある意味吃音を過去のこととして語れてしまう自分は、いま苦しんでいる人たちの気持ち、簡単に「わかる」と言ってしまうのではないかと。だが一方で、いまも自分の中に、予期不安の恐怖

えるはまだ。竹内はそれを信じて、少しずつネットワークを広げている。

そして実際、理解ある経営者はいるのである。

右利きへの矯正によって吃音が始まったと言った京都の栗田泰介は、最初に就職した会社を辞めた後、幸運にもそういう経営者に出会うことができた。次の就職先として入社したのがいま勤めている試作品作りの会社だが、面接のとき、社長に吃音のことを正直に話すと、社長は「そんなのは関係ないよ。自分の弱みを見ることはない。長所をどう伸ばすかにもっと力を注げばいい」と言ってくれたのだ。

「前の会社では、事前に話さずに入社し

やどもった瞬間の苦しい感覚がはつきりと残っていることも確かなのである。ふと、いつかまた吃音が戻ってくるのではないかと不安になる瞬間もある。最近時々また、私自身わずかにどもるような気がするからだ。

声を発するという、言ってみればただそれだけのことが、なぜ自分にはできないのだろう。吃音で苦しかったころはいつもそんな気持ちで満たされていた。きっと、多かれ少なかれほとんどの吃音者に共通する思いだろう。なぜ自分だけが、吃音さえなければ——と。

そこに必ずしも決定的な解決法はない。時に苦しさを受け入れ、また時にあがきながら、なんとか生きていくしかないのかもしれない。しかし、苦しさと懊悩の先には、必ず何か新たなものが生み出され、なんらかの道が開けていく。私はそう信じたいと思っている。

それぞれが見つけた道

歯科医の竹内俊充は、苦労の末に出合った訪問診療の世界でようやく自分の道で苦労したので、今回は、電話はいやです、ということも面接で伝えました。社長にあのよう言ってもらえたのは、とてもありがたかったです。

一度、機会があつて彼の会社を訪ねると、栗田は、マスク姿で箱状の機械の前に立ち、担当の仕事に取り組んでいた。業務上話す必要はほとんどなく、そのことが彼の気持ちを随分楽にしているようだった。

しかし、だからといって吃音の不安が消えたわけではない。その後栗田から届いたメールには、こう記されていた。

「記事には本名を入れないでほしいのです。いまは吃音と戦わないで眠らせておくことを選んでいます。本名が出て、周

を見出した。自分はいま話せないけれど、その分一生懸命やろうと、どうすればいいかを考え抜いた。その結果思いついたのが、言葉で説明するかわりに絵や図を使うことだった。当時は、そうしたことがまだ新鮮に受け止められる時代だった。「こんなに丁寧に説明してもらったのは初めてです」。患者に喜ばれることも多くなった。さらに「話せないならよく聞こう」と心がけ、患者の話を人一倍よく聞くようにすると、どんどん信頼してもらえるようになっていった。「この分野だったら自分もやってみてもいいかもしれない。そう思うことができました」

竹内は自分と同じ苦しみを持つ若者を支援したいと、昨年、NPO法人「吃音とともに就労を支援する会」を立ち上げた。同会は現在インターネット上で、吃音のある学生と、吃音に理解のある企業経営者をマッチングしようという試みを行っている（サイト名は「どーもわーく」。吃音についてちゃんと知ってもらえたら、きっと理解してくれる企業も増

りの目が変わることを恐れています」いま保ち得ているバランスを崩したくないのだろう。それは私が、吃音から脱却しつつあるときに思っていたことと同じだった。栗田のみ、仮名としたのはこのためである。

なんとかいまの状況が変わらずにあってほしい。彼が抱えているのだろう、願うような心情に、私は自分が重なってみえた。

事故を起こしたことですべてが変わった横井秀明は、信用保証協会を辞めた後、思い切って、以前から気になっていた道に進むことにした。それが言語聴覚士になることだった。専門学校に通うことに決め、二年間学んで資格を取った。そし

ケトル

最高に無駄が詰まった
ランチーママガジン

<http://www.ohatabooks.com/qjketter/>

毎週毎月15日発売 900円＋税 太田出版

好評発売中

て名古屋で病院に就職し、言語聴覚士としてのキャリアをスタートさせた。彼と会ったのは、病院に勤め始めてまもなく一年になろうというころだった。

その日、仕事を終えた横井と、彼の病院のそばのファミリーレストランで待ち合わせた。少し疲れた様子でゆっくりと pasta を口に運ぶ横井に、私は聞いた。

「自分が吃音を経験していることは、言語聴覚士としてはプラスになるのではないですか。すると彼は、いや、現実はそのようなものではないんですとすぐに言った。「たとえば小児の患者さんの場合、親御さんとしては、この先生も言葉の問題を抱えているから我が子のことをわかってくれると思うより、吃音のある先生に任せて大丈夫なのか？」と思う方が自然なんじゃないでしょうか」

横井自身、ときに患者から不信感を抱かれることもあるという。しかし彼は冷静にそのことを受け止めているようだった。現実の中で、自らのできることをしっかりとやっていくしかない。そうした強い意志を私は感じた。

横井は言語聴覚士としての仕事以外に、吃音を持つ子どもの親などの支援を目指す「名古屋きつおんサポート」を設立したりと、積極的に吃音者にかかわる活動を行っている。苦しみ抜いた末にいまの道にたどり着いた彼にしかできない仕事か、きつといくつもあるに違いない。

あがきつづければ、いつか

愛知での吃音ワークショップの日の夜、スピーチを終えた高橋啓太と話をしたのは、彼の家の、台所のシンクの前だった。その夜私は、高橋の言葉に甘えて一晩泊めてもらうことになっていた。

高橋は名古屋市内のアパートで、事実上娘さんと二人だけで暮らしていた。アパートの階段を上がりながら彼が、「すごい散らかってますけど……」と繰り返したように、廊下や部屋の隅っこには、あふれて行き場のなくなった衣類などが山積みになっていた。娘さんを一人で育てながらの生活がどれほど大変か、その様子からも見てとれたが、私を案内してくれた和室だけはきれいに整理され

ていた。布団まで用意されているのを見て、高橋の優しい心遣いに申し訳なくなるほどだった。

家に帰ると高橋はまず、娘さんを寝かした。娘さんは五歳という幼さだが、ワークショップの会場で一日中、一人おとなしくおもちゃを広げて高橋を待ち続けた。夜帰るころには見るからに疲れ切っていた彼女は、横になるとすぐに寝息を立てはじめたようだった。

そうしてようやく長い一日を終えた高橋と、台所のシンクの前で話をした。彼の状況を聞きながら、私は、何も意味のあることが言えない自分に嫌気がさし、そう思うほどに、無機質な銀色のシンクがその冷たさを増すように見えた。

一時間ほど話していると、すでに深夜一時を回ろうとしていた。そろそろ寝ようというところになったが、ふと高橋が、そういえば今日のスピーチで一つ心残りがありましたと、もう一度口を開いた。一日の疲れのせいなのか、言葉を詰まらせる回数をわずかに増やしながら、こう言った。

姉はその言葉を読み上げた。

「相談もせずにこんな結果を迎える形になって本当に申し訳ないです。ここまで育てていただいたことに心から感謝しています。この先の人生に悲観して、生きることが拒否したけれど、誰も恨まないでください。もう疲れました。できない自分、やろうとしない自分、逃げている自分、結局何も変わらなかった、こんな自分に価値がないと、このまま生きていても人様に迷惑をかけるだけ。だから、自分の人生に幕を閉じます」

黒いスーツ姿の姉は、声を詰まらせながら、さらに続けた。弟はきつと病院で、吃音を含めた彼の人間性を否定され続けたのだから、私は弟の死を絶対に無駄にはしない、と。

そのとき、私はまだ何も詳しいことは知らなかった。ただ、彼の姉の必死の訴えを聞きながら強く思った。この悲劇を今のままで終わらせてはいけなはずだと。

二週間後、私は北海道へ飛んだ――。

(敬称略)

45

「本当は、今日、就職も決まった段階で、みんなの前に、立ちたかったんです。仕事まで見つかったこそ、一応は乗り越えた、と、いえるのだと思うので。ただ、自分分は、これだけ、話せるようになったので、いま就職できていないのは、吃音だけのせいではないんです。そのことは、はつきりと、わかってもらいたかった。何でもかんでも、吃音のせいばかりに、しては、だめなんです」

苦しみを乗り越えるためには、どうしても吃音者自身がなんとかするしかない。苦しくとも、あがきつづけなければいつか何らかの道が見えてくる。高橋は身をもってそれを示そうとしているのだ。

*

ここで文章を終えられたらどれだけいいかと私は思う。

しかし、現実がそれを許さない。高橋はいま、なんとか自ら道を切り開きつつあるように見えるが、一度は死の淵まで行っている。そのようにギリギリのところにいる吃音者は少なくない。そして、あがいてもあがいてもどうにもならな